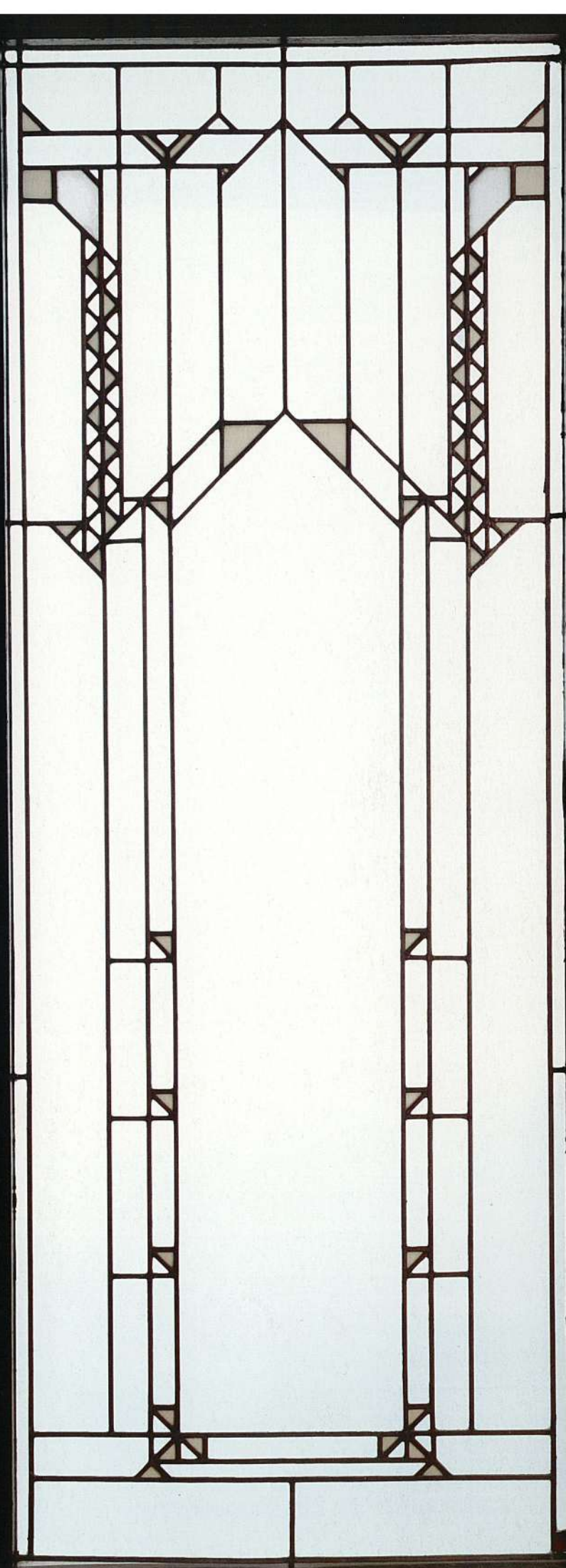


# MEIJI MURA

## 明治村だより

Vol.53 2008 Autumn

- 世界へはばたく一日系移民のあゆみ 2
- 世界で最初に相撲を見た王様 本田正文 8
- 秋の催しもの 9
- A La Meiji-mura 10



平成 20 年 9 月 20 日発行  
「明治村だより」第 53 号 (平成 20 年 秋)

発行 博物館明治村  
〒484-0000 愛知県犬山市内山一番地  
電話 (0568) 67-0314  
http://www.meijimura.com  
製作 大日本印刷株式会社

「明治村だより」第 54 号発行のお知らせ  
発行時期 平成 20 年 12 月初旬 (予定)  
申込方法 「明治村だより」第 54 号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料 140 円切手とともに封書にてお申し込み下さい。



表紙 フランス・リトル邸のステンドグラス (フランク・ロイド・ライト デザイン) 帝国ホテル中央玄関に展示中

◎お詫び/先号 (Vol.52) に下記の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。  
3 ページ 誤 写真 5 ブラジルでの七夕  
正 写真 5 ブラジルでの七夕 (目で見るブラジル日本移民の百年) より

# 世界へはばたく 日系移民のあゆみ

先号でもお伝えしましたが、今年にはハワイへ初の移民が旅立って百四十年、ブラジルへ移民して百年にあたります。博物館明治村ではこれを記念して「世界へはばたく 日系移民のあゆみ」を開催しています。この誌面では、日本の移民がハワイ、北米そして南米へと移り変わっていく様子を当時の国内外の状況とともに博物館明治村の収蔵資料を交えてご紹介いたします。

## 旅立ち ～ハワイへ～

日本から初めての移民が旅立ったのは一八六八年、時代が江戸から明治へ代わるころ、イギリス船「サイオート号」(写真1)で横浜から出航しました。十九世紀半ばのハワイは、それまで基幹産業だった捕鯨業が衰退し始め、サトウキビ(甘蔗)栽培が次なる産業として成長し始めたところでした。しかし、

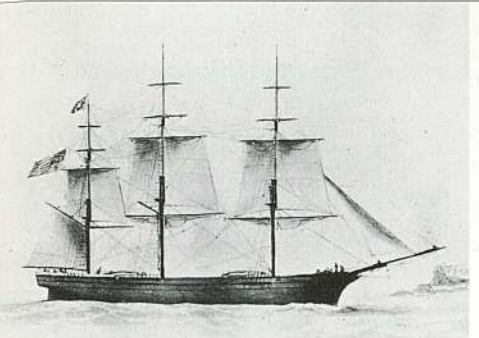


写真1 サイオート号

当時、ハワイの人口は約半分に激減するなど労働力不足が大問題となっていました。そこで国として、移民を東洋に求めることとなりました。日本では横浜駐留のヴァン・リードを公証人とし、江戸幕府との間に「日

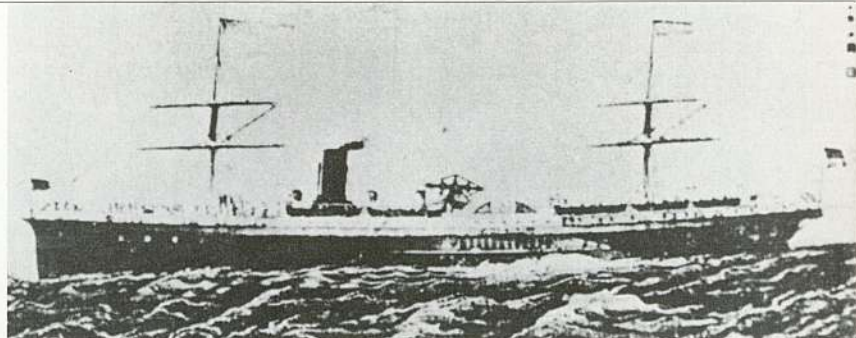
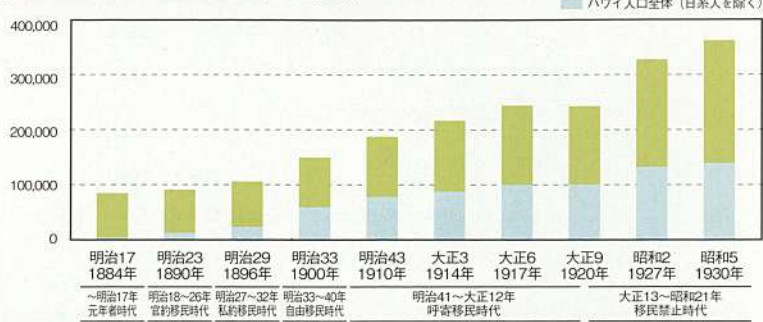


写真2 東京市(シティ・オブ・トーキョー)号

図2 ハワイにおける人口推移



「ハワイにおける日本人の居住地・出身地分布 1885年と1929年」 飯田耕二郎(人文地理(1994)第46巻第1号)より作成(永井松三「日米文化交渉史」第五巻「移住編」洋々社 1955)

本ハワイ臨時親善協定」を結び、約三百人分の渡航許可書の下付を受けました。しかしこの旅立ちは、日本と通商条約が締結されていないハワイ(布哇…当時はハワイ王国)への出国であること、旧幕府のみの許可を得、新政府の許可は得ていなかったことから、日本とハワイとの間に外交問題を引き起こすこととなりました。

## 官約移民

明治四(一八七二)年、日本とハワイの間に修好通商条約が結ばれ、明治十四(一八八二)年ハワイ王国のカラカウア王が来日、明治天皇に移民を要請し、明治十七(一八八四)年、移民約定書が締結されました。この日本とハワイの両国政府の契約により、政府による「官約移民」制度が開始されました。第一回の官約移民は東京市(シティ・オブ・ト



写真3 竣工時のハワイ移民集会所(現:明治村4丁目40番地)



写真4 日本人牧師・岡部次郎とその家族



写真5 サトウキビ耕地で働く女性たち



写真6 仕事の開始と終了を告げたベベケオ耕地の鐘



写真7 サンダードレスを着用した女性(左)

キョー)号(写真2)で九四六名が渡航し、その後、明治二十七年までに二六回、二九、一三九名がハワイへ渡りました。

## 移民のくらし

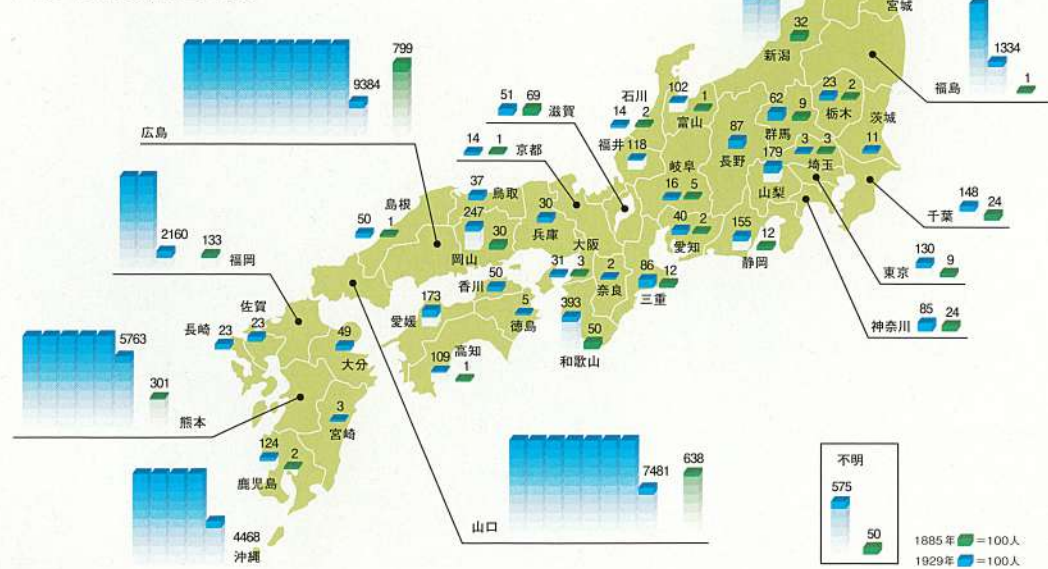
初期の移民は雇用主と三カ年の契約を結び、主に開墾やサトウキビ耕地での肉休労働に従事しました。サトウキビ耕地での労働は、午前六時から午後四時半までで、途中休憩は十一時半から十二時までの、一日十時間の長時間労働の毎日でした(写真5、6)。休日は日曜日だけでしたが、皆普段の辛さを忘れるために、おしゃれをして教会に出かけたり、思い思いに過ごしたといわれています(写真7)。

三カ年の契約を終えると、自分で事業を起したり、監督として労働者を管理するなど、移民の職業が多様化してきました。過酷な労働に耐えている移民を慰問するため、一八八七年にアメリカ本土からキリスト教会の牧師が招かれ、一八八九年には日本人僧侶による仏教の布教が開始されました。

## 教育

一八九三年、ハワイにおいて最初の日本人学校がキリスト教系の牧師によってハワイ島に創設され

図1 ハワイ移民の出身県



「ハワイにおける日本人の居住地・出身地分布 1885年と1929年」 飯田耕二郎(人文地理(1994)第46巻第1号)より作成(永井松三「日米文化交渉史」第五巻「移住編」洋々社 1955)



写真13  
2世写真帳（シアトル  
日系福音教会に戦前住  
んでいた安武嘉一郎氏  
の長男・長女）

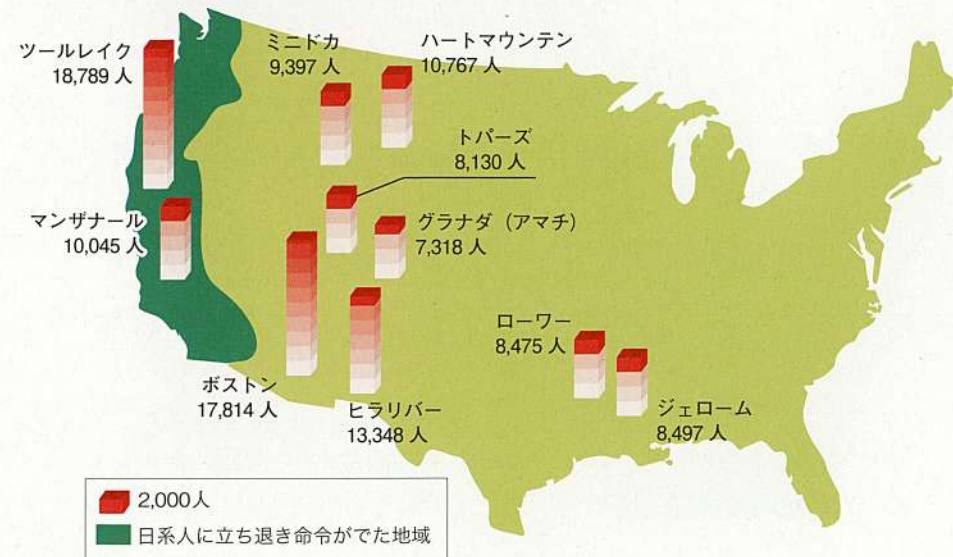


写真14 第100大隊



写真15 442聯隊

図6 日系人収容所分布図



なりました。  
移民数の増加に相反して、アメリカ国内での排日活動は激化の一途をたどり、一九二〇年、日本人の土地所有権の否定や、一部の人は第一次世界大戦中の功績で得た帰化権をも否決されるという事態に発展しました。さらに一九二四年の「排日移民法」の実施により日本人の新たな移民の道は閉ざされました。

**第二次世界大戦 戦中・戦後**  
昭和十六（一九四一）年十二月八日（日本時間）、日本軍の真珠湾攻撃で、激戦の火蓋が切られた太平洋戦争は、アメリカ本土やハワイの日系人にも暗い影を落としました。

開戦直後、ハワイは戒厳令が布かれ、三年近くの間、軍の統制下に置かれることになりました。

た。危険人物とみなされた一部のハワイの日系人は居住している島とは異なるハワイの島や、アメリカ本土の収容所（Concentration camp または War Relocation Center）に、またアメリカ本土西海岸の日系人は全米各地に設けられた収容所に隔離されました。二世たちは自ら志願し、日系人だけで第一〇〇大隊や第四四二聯隊を構成し、激戦地での任務に就き、「Go For Broke」（当たって砕ける）の掛け声のもと、大きな犠牲を払いながらも、アメリカの勝利に寄与しました（写真14、15）。このことは戦後の日系人の活躍の足掛かりとなったといえます。特に戦前から戦後にわたり一世には市民権はおろか土地所有権も認められていませんでしたが、一九五二年に発効されたマッカーラン・ウォルター法により、帰化権を得ることができるようになりました（写真16）。



写真16 帰化証明書



図3 ハワイにおける日系学童数と日本語学校数

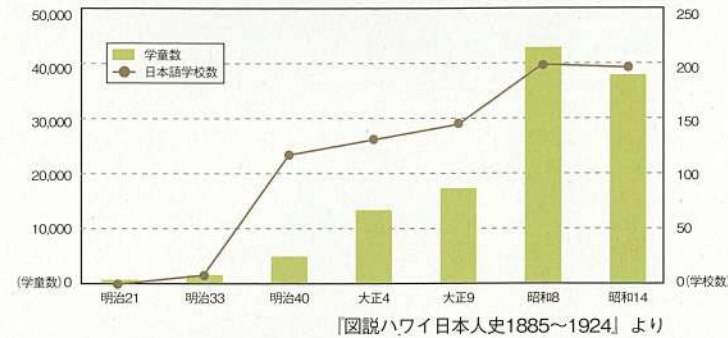


図4 1885(明治18)年 移民と国内労働者の賃金比較

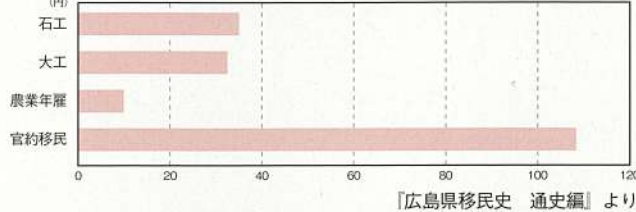


図5 アメリカ本土の日系人人口の推移

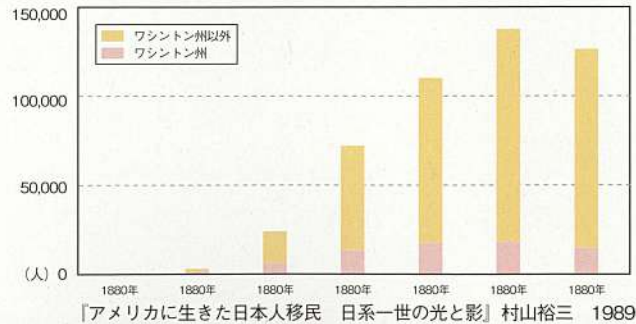


写真12 大阪商船ポスター



写真10 アメリカ合衆国シアトルへの旅券



写真11 三等室  
【郵船図会】風俗画報239号 1901

写真9 パホア日本人小学校 1932



写真8 パホア日本人小学校 1904

続されました。学校の名称は「日本人学校」から「日本語学校」に、内容もハワイで独自に制作されたものになりました。一九二〇年と一九二三年に日本語学校を取り締まる法案が議会で提出され、通過しました。それに対して日本語学校側が憲法違反としてハワイ属州政府を提訴するという事態にまで発展しました。結局、一九二七年にアメリカ最高裁判所で日本語学校の勝訴の判決が下され解決をみました。

**北米への移民**  
一八九〇年代になるとアメリカ西海岸の好景気に刺激され、多くの日系人がアメリカ西海岸へ渡航しました。しかしハワイは一八九八年にアメリカに併合され、一九〇〇年にアメリカで公布されていたすべての契約労働者の入国を禁止する「合衆国移民法」が適用されることになりました。その一方で、これまでのハワイにおける契約労働者はすべて自由の身となり、ハワイからの転航者が続々とアメリカ本土の土を踏みました。しかし、増加する低廉な労働者としての日系移民の流入はアメリカの労働力市場を脅かす存在となったため、アメリカ政府は一九〇七年日本人の転航禁止、さらには日本政府と「日米紳士協約」を締結し、日本政府の旅券発給に制限をかけ、自力で移住することが困難な、いわゆる「呼寄せ移民」の時代が始まりました。

航路の拡張

移民の渡航先と外国航路の拡張は、密接な関係がうかがわれます。  
日本の外国航路は、まず中国や台湾、インドなどのアジア航路が開設され、その後、欧米や豪州航路が開拓されました。明治二十九（一八九六）年、日本郵船によって開設されたシアトル航路は、シアトルーニューヨーク間のグレートノーザン鉄道と接続し、日本ーニューヨーク間の所要日数が短縮されることとなり、シアトルの街の発展の第一歩とも

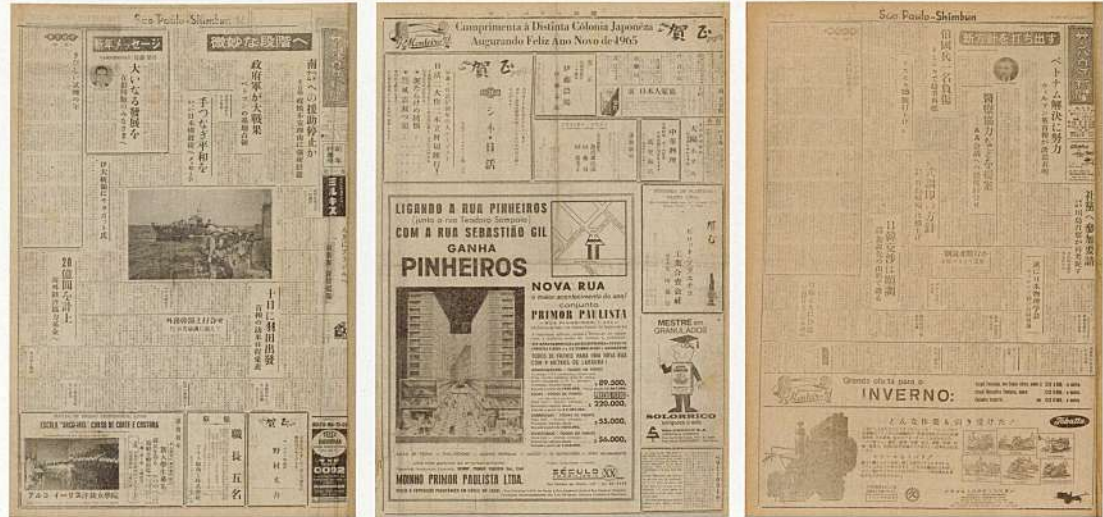


写真21 サンパウロ新聞 現在も発行されている日本語新聞

戦前～戦後 ブラジル日系移民関連事項

1938年	ブラジル全土に294校あった日本人学校（日本語学校）が閉鎖される
1941年	日本語新聞の発行停止
1942年	ブラジル、日本との国交を断絶
1945年	第二次世界大戦終結、ブラジル国内で日本勝利のデマが流れる。戦争終結直後から「勝ち組」と「負け組」の対立激化、20人を超す犠牲者（～1952）
1946年	在ブラジル・スウェーデン大使館より日本敗戦の布告書がブラジル日系社会にもたらされる。日本語新聞（サンパウロ新聞）の発行再開、その後各種日本語新聞が発行される

図9 戦後日本からブラジルへの移住者

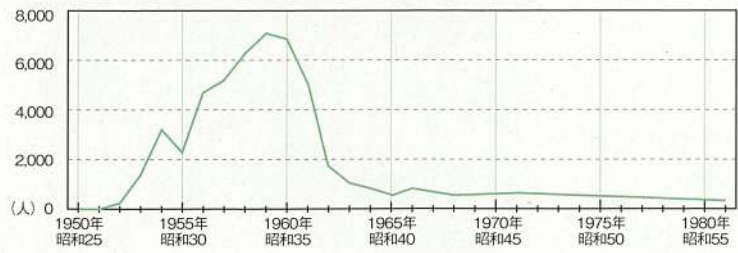
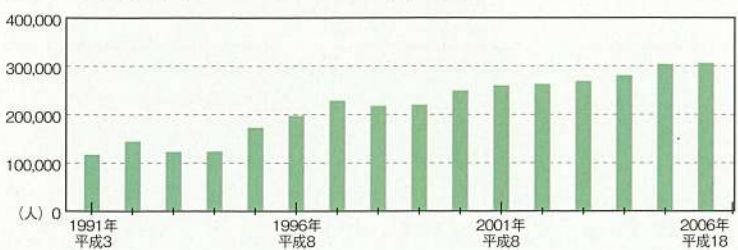


図10 来日日系ブラジルからの移住者数



第二次世界大戦

第二次世界大戦はブラジルにも深刻な影響を及ぼしました。というのもブラジルは連合国側につき、同盟国側の日本とは敵対関係となってしまったからです。

第二次世界大戦が始まると、ブラジルは日本との

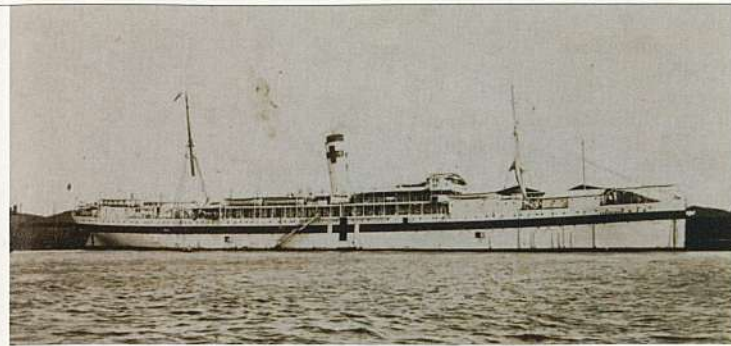


写真18 笠戸丸 この写真は病院船として用いられた時のもの



写真17 明治村へ移築されているブラジル移民住宅の旧状。この建物は、大正8（1919）年、日本人人工によりレジストロに建てられた

図7 ブラジルへの渡航者数推移



図8 第1回ブラジル移民出身県別内訳

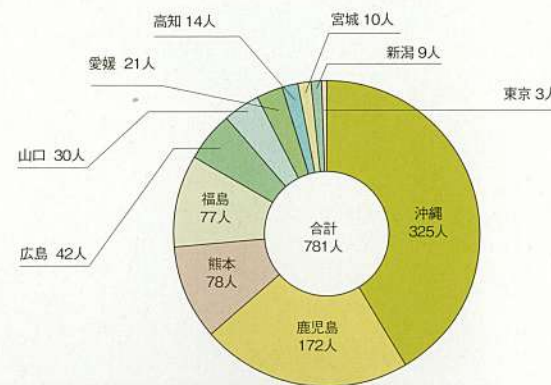


写真19 森林での伐採作業

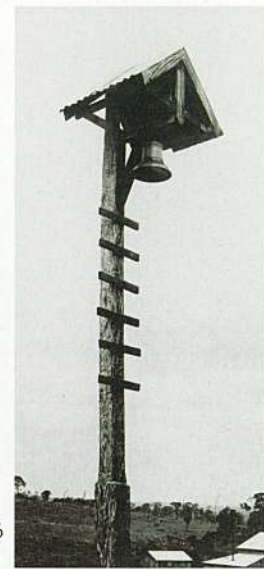


写真20 ファゼンダ（農園）の鐘 この鐘の音で毎日10時間を超える労働を開始し、労働を終えた。

ブラジルへ

南米への移民は一八九九（明治三十二）年のペルーへの移民から始まりました。ブラジルから日本へ最初の移民要請があったのは、一八九四（明治二十七年）年ですが、当時まだ日本とブラジルの間

には修好条約が締結されておらず、実現には至りませんでした。その後、一九〇八（明治四十二年）、初めてのブラジルへの日本人移民七百八十一人が、笠

戸丸（写真18）で神戸を出航しました。しかし、この第一回移民は契約の期間を待たずに、期待した収入が得られないと判断し、配耕先の耕地から離れる者が多く、失敗に終わったと言えます。

一九〇八年に日米紳士協約が結ばれ、アメリカで排日運動が高まりをみせてきた頃から、移民の渡航先がハワイ・北米から中南米に移ってきたことは特筆すべきことでしょう。

ブラジルでの労働

初期のブラジルへの移民は移民会社の募集に応募した契約移民が大多数を占めていました。契約移民は下記の条件があるものの、渡航費用などの援助が得られるなど特典がありました。

契約移民の条件

サンパウロ州内のコーヒー園で1年半の労働  
年齢12歳以上45歳以下の男女3人以上からなる家族

■ 賃金

所持コーヒー1000株につき 年70～100ミルレース（45.5円～65円）  
収穫コーヒー50ℓにつき 450レース～500レース（29.3～32.5銭）  
日給賃金 2～2.5ルレース（1.3～1.625円）

■ 自己負担の渡航費用

渡航手数料 20円  
日本～ブラジル間の船賃 82.24銭  
（船賃全額は160円 残りはサンパウロ州政府負担）  
その他 9.5円

（「広島県移民史」「大正期の移民」より）

## 村の秋祭り

● 9月20日(土)～11月30日(日) ●

### ★村の秋祭り2008★ 明治+グルメ博

#### 愛され続けた「明治ゆかりのカレーフェア」

〈明治村食堂1階〉  
明治の味を今に引き継ぐ全国のこだわりカレーや明治に由来する美味しいカレーをお召し上がりいただけます。



#### 偉人の愛したグルメ

〈碧水亭・京都七條お休み処・浪漫亭・デンキブラン汐留バー・明治村食堂〉  
3種類の食べ比べセット

夏目漱石や小泉八雲など明治の偉人が好んで食したり、偉人にちなんだグルメを紹介。



福沢諭吉ゆかりの「牛鍋定食」

夏目漱石ゆかりの「開化井」、福沢諭吉ゆかりの「牛鍋定食」、小泉八雲ゆかりの「クレオール料理」、明治の文豪が好んだ味を詰め合わせた「明治文豪弁当」などがお楽しみいただけます。

#### 明治のベストセラー小説「食道楽」のグルメ

〈食道楽のコロツケー店・食道楽のカレーばん店・食道楽のカフェ・明治村食堂〉



お米のオムレツバーガー

愛知県豊橋市出身の小説家・村井弦斎のベストセラー料理小説「食道楽」のレシピを元に再現したメニューをご賞味ください。

#### 文明開化のグルメ

〈明治村食堂2階・大井牛肉店・食道楽のカフェ・デンキブラン汐留バー・浪漫亭〉

文明開化の象徴「牛鍋」や日本初のカクテル「デンキブラン」など文明開化の浪漫薫る数々のグルメをお楽しみください。

### 村の秋祭りイベント

#### 黒船来航の地「横須賀フェア」

10月11日(土)・12日(日)  
〈2丁目レンガ通り〉

#### 阿波踊り公演

10月18日(土)・19日(日)  
〈2丁目レンガ通り〉  
12時～、14時～  
(2回公演 各回約45分)  
出演 阿波踊 太閤連

#### 越中八尾のおわら踊り

11月1日(土)  
〈街流し〉 13時半～14時【帝国ホテル前周辺】  
〈呉服座公演〉 14時半～15時【呉服座・有料】  
〈輪踊り〉 15時10分～15時半【呉服座前】  
11月2日(日)  
〈街流し〉 11時～11時半【帝国ホテル前周辺】  
〈呉服座公演〉 ①12時半～13時  
②13時半～14時【呉服座・有料】  
〈輪踊り〉 14時10分～14時半【呉服座前】

出演 富山県民謡越中八尾おわら保存会  
※ 呉服座公演鑑賞料：700円(入村料別途必要)

#### 明治開港の国際貿易港「門司港フェア」

11月8日(土)・9日(日)  
札幌電話交換局横・2丁目レンガ通り 特設ブース

#### お祭りチンドンフェスティバル

11月29日(土)  
出演 立命館大学出前ちんどん、よいこチンドン、嵐ほか

#### 村の秋祭りファイナルイベント

「鳴子踊りフェスティバル」  
11月30日 帝国ホテル中央玄関前 ※雨天中止  
時間 12:00～、14:00～(各回約45分)

### 秋の催しもの

#### 燈台記念日～品川燈台特別公開～

11月1日(土)～3日(祝)  
協力：第四管区海上保安本部・(社)燈光会

#### 明治村写真コンテスト 入賞作品展

9月20日(土)～11月30日(日)  
〈東山梨郡役所2階〉

### 呉服座落語会 特別企画「三遊亭好楽・林家たい平二人会」

11月16日(日) 〈呉服座〉予約・定員制

#### INFORMATION

開場	12時半～	(木戸銭)
開演	13時～	前売券 4,000円
	(公演時間約2時間)	前売入村セット券 5,000円
出演	三遊亭好楽、 林家たい平、 三増れ紋	当日券 4,500円
主催	名古屋鉄道、テレビ愛知、 博物館 明治村	(全250席・全自由席) ※前売券の発売は10月4日～ 詳しくはHPもしくはお電話で お問い合わせ下さい。

## なげし 長押に込められた想い

●幸田露伴住宅（三丁目26番地）



写真1 幸田露伴住宅「蝸牛庵」

蝸牛庵（かたつむりの家」と名づけられたこの家は、幾度となく住まいを変えた幸田露伴が、明治三十一年（1897）年から約十年間を過ごした建物（写真1）です。東京都の向島墨東（隅田川の東岸）と呼ばれ、江戸時代、豪商の別邸や大名の下屋敷が多く建てられた閑静な場所にあります。

一般的に明治といえば西洋建築が思い浮かびますが、それは官庁や学校、駅舎などほんの一部にすぎず、庶民の住宅をはじめ、和風建築が日本の建築史上最高の水準を呈していたことは注目に値します。江戸時代までは、二階建ての住宅が禁じられるなど様々な制約がありました。明治時代にはその制約も少なくなり、市民の経済力の向上とともに、町屋や農家のレベルを飛躍的に押し上げる一因となりました。明治初年に建てられたこの蝸牛庵の建物も、広い庭に廊下を軸に玄関、和室、付書院のある座敷が伸び広がった間取で、自由な伸びやかさを感じます。

以前から禁令が出されており、天保十四（1843）年には老中水野忠相が「違反建築は厳罰に処する」と、厳しい触書を出しています。

長押は建物の一種の権威の象徴であったわけで、こうした長押の禁令が人々のあこがれとなり、封建制度から解放された明治以降、誰もが長押を付けはじめました。もともと長押は柱同士を水平方向につなぐため、柱を挟んで固定するための構造



写真2 水鳥をかたどった釘隠し

造上必須の部材でした。古代からの日本の木造建築の構造は柱や梁で骨組を作り、桁を渡して建物を自立させます。その構造強度を増すために柱の両側を挟んで釘で留めたのが長押の始まりです。軸部を固めるためには水平のつなぎを多用せねばならず、古い様式を残す社寺建築では、地覆長押・腰長押・内法長押・蟻壁長押・天井長押等々（図1）と多く用いられています。しかし中世になり中国から柱の中間部に貫を通すという「貫構法」の技術が入ってくると、長押には構造上の耐力は必要とされず、段々と薄くそして幅広にと、裝飾材へ変化してきてきたのです。

現在室内の長押（図2）といえは、鴨居の上に取り付ける内法長押が一般的ですが、その部材は長押挽きと称する三角形断面（図3）にするのが普通で、造作材なればこそそのつくりです。くつきりと水平に連続する長押は、和室の空間を引き締め、調和をもたらすデザインのポイントになっていますが、部屋の格式を決定するものとして、厳格で正式な「真」の座敷には柱の〇・八倍以上の幅広の長押を、やや気楽な「行」の座敷には柱の〇・五倍位のもの、茶室風な「草」の建物には長押は用いない、と言われていました。蝸牛庵が明治初年の建物と聞くと、この長押一本にも当時の施主と大工の特別な思いを感じたりするのです。



図3 長押の断面

図2 室内の長押

図1 社寺建築の軸部

図1,2,3とも「図解 日本建築の構成」山本幸一著 彰国社 1986年

## 便器に希求されるもの

- 幸田露伴住宅「蝸牛庵」（三丁目26番地）
- 菅島燈台附属官舎（三丁目30番地）
- 三重県庁舎「明治のくらしよろず体験」（一丁目13番地）
- 長崎居留地二十五番館「明治の廁」（三丁目31番地）



写真1 幸田露伴住宅「蝸牛庵」内の染付便器（角形）



写真2 菅島燈台附属官舎の染付便器（小判形）

明治村に展示されている建物や資料は、どれも魅力溢れるものばかりです。ところが、村内数箇所に展示されているながら、意外と見過ごされがちなのが、今回ご紹介する便器です。特に今回は、陶磁器製の染付便器をご紹介します。

染付便器とは、白地の生地に呉須（酸化コバルト）で絵付けをして、その上に透明釉を掛け高温焼成した、陶磁器製の便器を指します。染付便器は、それまで主流であった木製便器に変わり、明治時代中期以降に愛知県瀬戸市や常滑市などで生産され始めます。明治二十四（一八九一）年に起きた濃尾大震災以後、特に旅館や富裕層の復旧家屋用として、需要が高まったといわれています。村内の幸田露伴住宅「蝸牛庵」（写真1）、菅島燈台附属官舎（写真2）にも染付便器が設置されており、そこで生活した人々や、家主の階層を窺い知ることが出来ます。

ちを踏襲した「角形」の大便秘器や、開花した朝顔に似た「朝顔形」の小便秘器、対面した時の向こう側が高くなかったとされた「向高」の小便秘器などが当初製造されていました。その後、現在私達が最も目にする「小判形」の大便秘器も生産され始めました。当初、便器製造の主産地は瀬戸や常滑でしたが、のちに信楽、有田、平清水（山形県）などでも生産されるようになります。明治三十年代後半から明治四十年代にかけて便器生産は隆盛を迎えます。染付便器の主要な生産地であった愛知県瀬戸市内にある湯の根地区では、明治四十（一九〇七）年頃、生産される焼きもののうち五十パーセント、明治末年には七十パーセントが便器でした。便器の生産量の増加に伴い、石膏型の使用や絵付け転写法の開発など、技術的にも発展しました。

なかでも、明治三十年代初頭から生産された、愛知県瀬戸市の六代加藤紋右衛門（二八五三〜一九一〇）の「還情園池紋工場」



写真3 長崎居留地二十五番館内の「池林堂半七製」便器



写真4 「池林堂半七製」の銘

コーナリー、紋右衛門家筋で、同じ地区で工場を構えた加藤半七によって製造された、「池林堂半七製」の便器（長崎居留地二十五番館内「明治の廁」）が展示されています。この「池」という銘は、加藤紋右衛門らの窯場が「雨池」とよばれる池の近くであったことから、屋号に用いたといわれています（長崎居留地二十五番館内「明治の廁」写真3、4）。

しかし、特に陶器製の染付便器の生地は吸水性が高く、貫入（焼成後、冷却時に陶

で生産された便器は特に人気が高かったといわれています。加藤紋右衛門は、江戸時代後期から大正時代における瀬戸を代表する窯屋でした。海外の万国博覧会や内国勸業博覧会などにも花瓶や壺などを出品し、その製品は国内外で高く評価されていました。

器の表面に生じる釉のヒビ）が多く入っていたため、便器としての機能はあまり優れていませんでした。そのため、明治時代後期から大正時代初期にかけての「衛生」への意識の高まりとともに、便器としての機能に優れた、青磁釉による磁器製便器が主流となってきました。また、日露戦争後（明治三十年代後半）の洋風建築の増加に伴い、輸入による衛生陶器の需要も高まりつつありました。大正期以降の便器には、下水道設備の進展、国産の水洗式便所の登場などにより、清潔さ、強度、成形のしやすさといった機能が便器に対して重視されはじめたことで、染付便器は影を潜めていきま

染付便器は、江戸末期から明治にかけての、便器に装飾性が希求された時代の主役として、トイレに藍色の彩りを添えたのです。

村内で見かけることがありましたら、ぜひ一度足を止めてその美しさをぜひご覧ください。

### 参考文献

- ・「染付古便器の粹―清らかさの考査」NAXライブ ミニシアター企画委員会、二〇〇七年
- ・「日本トイレ博物館」阿木香はか株式会社NAX、一九九〇年
- ・「東陶機器七十年史」東陶機器株式会社一九八八年

### 参考文献

- ・「図解 日本建築の構成」山本幸一著 彰国社 一九八六年
- ・「建築徒然草」山片三郎著 学芸出版社 一九七九年